

オムニバス形式型導入教育の再編成とその評価

尾澤 重知*1 牧野 治敏*1 西村 善博*2

大分大学 高等教育開発センター*1 大分大学 経済学部・高等教育開発センター*2

実践研究の背景

学生に対して、大学の理念や全体像をいかに伝え、大学教育への導入を促していくかは重要な課題である。大分大学では、このための導入教育の一環として「大分大学の人と学問」（全学共通科目。全学年が履修可能）を平成 16 年度に開講した。

本授業は、学長や学部長、理事など役職者などの講演を中心とした、いわゆるオムニバス形式で運営が開始された。開設当初から大分大学を特徴づける授業として、学生からは一定の評価を得ていたものの、平成 17 年度に報告者の一人が実施した授業の参与観察では、学生の私語をはじめとして、オムニバス形式特有の授業の問題点が見いだされた。

これを受けて、平成 19 年度からは高等教育開発センターが中心となって授業の再編成を行い改善を試みた。本報告の目的は、再編成にあたって工夫した点と学生からの評価を示すことで、オムニバス形式型の授業の運営に求められる要素を明らかにすることである。

再編後の授業概要

本授業の再編成にあたって、前年度の参与観察結果等に基づき、いくつかの改善を図った。具体的には、(a)コーディネータの設置、(b)学生へのフィードバックの重視、(c)大学での学習方法を学ぶグループ学習の実施である。前年度までは全てが講演形式だったが、今回は 15 回のうち 9 回をオムニバスの講演とし、残り 6 回は独自の企画とした（表 1）。

上記(a)と(b)は、オムニバス形式型の講義で失われやすいと考えられる授業の一貫性、継続性を高めるための工夫である。全ての授業でミニッツペーパー（ミニレポート）への記入を学生に求め、翌週の授業ではミニッツペーパーで見られた質問への回答や、コメント等を記した「授業フィードバック」（A4 で 1 枚～2 枚程度）を配布した。

表 1 「大分大学の人と学問」の授業の概要

回次	日程	授業内容(タイトル)	ミニッツ 提出数	課題レポート 提出数
1	4月11日	ガイダンス。大学での学習方法（基礎）	132	不要
2	4月18日	大分大学の理念（学長講演）	108	45
3	4月25日	キャンパス・ハラスメントの防止に向けて	111	48
4	5月2日	教育福祉科学部の人と学問	100	41
5	5月9日	大学での学習方法（応用）	113	不要
6	5月16日	プロジェクト型グループ学習Ⅰ	112	不要
7	5月23日	経済学部の人と学問	107	39
8	5月30日	医学部附属病院の人と学問	108	38
9	6月6日	プロジェクト型グループ学習Ⅱ	110	不要
10	6月13日	医学部の人と学問	116	75
11	6月20日	プロジェクト型グループ学習Ⅲ	114	不要
12	6月27日	副学長によるシンポジウム	113	56
13	7月4日	工学部の人と学問	110	60
14	7月11日	プロジェクト型グループ学習Ⅳ	118	不要
15	7月18日	プロジェクト型グループ学習Ⅳ	117	122

(c)では、大学での学習方法を学ばせることを第一の目的としつつ、講演内容を実践的に検討できる場を提供した。例えば、第1回目のグループ学習では、学長の講義内容を元に、仮想の「学長裁量経費」を配分させることを課題とした。また、第14～15回目のグループ学習では、大学の広報（パンフレット等）や本授業で改善すべき点などを取り上げた。

授業の課題としては、オムニバス形式型の講演9回のうち3回以上のレポート提出と、学期末での最終レポート提出を求めた。レポートについては、優秀レポート制度を設け、優秀レポートを履修者全員に配布し、レポートの評価基準も併せて示した。

研究方法と結果

本授業には、約130名が実質的に参加し、最終的に122名に対して単位を認定した。本授業の評価にあたっては、学期中間と学期末に実施した質問紙調査を中心に、ミニッツペーパーと、レポート課題の内容を量的・質的に検討した（表1に提出数等を示している）。学期末の調査では、105件の回答が得られた。回答者の学年属性は、1年生25.7%(27名)、2年生42.9%(45名)、3年生16.2%(17名)、4年生15.2%(16名)であった。

学期末調査では、授業全体の評価として第一に、本授業の改善点について学生の評価を尋ねた。ミニッツペーパーの実施や、授業フィードバック、グループ学習を行ったことについては全体の98～99%が肯定的に評価した。優秀レポート制度については、これよりも評価は低く全体の91.3%の肯定的評価だったが、高評価を得たとみなせる。

第二に、授業の成果を検討するために、レポートなどを書く力や、グループワーク等を通してのディスカッション力、また「問題発見」「問題解決」力などが身についたかを尋ねた（表2）。結果、今後の大学生活で役に立つという項目で、最も高い評価となった。

表2 学期末調査「授業の成果」

項目	5段階評価	S.D.
今回の授業で学んだことは、今後の大学生活で「役に立つ」と思う	4.14	0.89
演習等を通して「問題発見力」が身に付いたと思う	3.97	0.89
講義レポート作成を通して、「書く」力が身に付いたと思う	3.92	0.91
演習等を通して物事を「多角的(複眼的)」に捉える力が身に付いたと思う	3.88	0.86
演習等を通して「問題解決力」が身に付いたと思う	3.81	0.98
グループワークを通して、自分の意見を言う力が身に付いたと思う	3.77	0.93
ミニッツペーパーを通して、「書く」力が身に付いたと思う	3.75	0.95
グループワークを通して、ディスカッションの能力が身に付いたと思う	3.72	0.99

学期末レポートでは授業全般に対する評価を求めたが、総じてオムニバスによる講演とグループ学習を組み合わせることが効果的に働いているという結果が得られた。ある学生は、最終レポートの中で、授業とグループ学習の関係について次のような分析をしている。

この講義は自分にとって勉強になったと初めて思えた授業だった。問題発見と問題解決の授業では、自分について考えた。自分勝手な行動はかなりあると実感したし、改善してみようと思った。(略)正直、他の先生の講義はあまり興味あるものではなかったので、覚えていないが、そういった自分の姿勢も悪いんだと考えさせられた。知ろうとする気持ちや、話をする人の思いに少しでも近づこうとする気持ちが大切だと思った。頭では分かっているが、なかなか難しいことは沢山あると実感した。この授業は考えることが多くて疲れた。(3年女)

本授業は来年度も継続の予定である。今後、断片的なオムニバス形式による講演を、いかに自分のものとして学生自身に吸収させ、さらなる統合を促していくかが課題である。